
天然恋物語

ゆや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天然恋物語

【Nコード】

N1846T

【作者名】

ゆや

【あらすじ】

5年間人事部に居た生川涼音^{おいかわ すずね}は、春に営業課に異動になった。その先で出会った新人の男は、美形だった。更に上司の課長（既婚者）も美形。そんな二人の美形はトラブルメーカー。平凡な日常を送っていた涼音は毎日気苦労が絶えない。

一話完結型の連載です。

これは持論である。

天然は、行き過ぎると迷惑の産物である。と――

短大を卒業後にこの会社に入社した、中小企業の会社の人事部で働き始めて、早五年が経った。私、生川涼音おいかわ すずねには彼氏が居た事はなかった。とにかく中学時代から我武者羅に勉強して、早く大学を出て働きたかった。その為に遊ぶ時間を削って、バイトに勤しんだ。その努力が実って、第一志望のこの会社に入社出来たはいいが、なんの成果もあげれないまま気付けば25歳になっていた。

実に平凡な人生だ。私が望んでいた通りの。もっと欲を言うなら出世して、部下を持てるようになりたかったくらいだ。なのだが、年々入ってくる新入社員には先輩止まりで、先に後輩達が出世していつてしまう。何故だ。出来の良さであれば絶対私の方が上なのに。将来性があるからか？私にはないと、そう言いたいのだろうか。

考えれば考えるだけ後ろに突っ走っていく思考を止めるように、焼

酎を仰ぐ。美味しくもないお酒は私を酔わすだけの役割でしかない。多分、会社もそうだろう。

美味しい才能もない私は、真面目に働いてくれるというだけの役割だけなのだろう。だから褒められはしても、出世はしない。

そういえば、この間出世していった子は凄い可愛い女だった。世の中見た目か。

「お客さん、ラストオーダーになります。」

店員の呼びかけで我に返った私は、会計を済ませると、居酒屋を出た。

なーんにもない。私が望んだ通りの人生は、面白くもなんともない。綺麗な容姿も強気で明るい性格も破天荒で会社に貢献出来るような才能も、私にはなんにもない。

ただ漠然と、貯金通帳のお金の数値が上がっていくのが好きでしかない。なんの変哲もない凡庸な私にはお似合いの人生だ。

——そう、数日前は冗談で思っていた。なのに、今は本気で思う。

今年の春から異動になった先の営業課には、美形が二人居た。一人は課長（既婚者）で、もう一人は子今年入ったばかりの新入社員。つまり私の後輩に当たる男。

その男は、黒い髪を後ろに撫で付け、大きくて形の良い目にバサバ

サと長いまつ毛。スウーッと通った綺麗な鼻筋に、薄めの形の良い唇。肌なんか白くて肌理細やかで、肌のテカリなど思わせないような清潔感に溢れていて、なんで女じゃないんだろうって思う。極め付けは、やけにデカい身長。彼曰く、高校の時はインハイに行くぐらいにバスケが上手かったとか。

190近くある身長に見下ろされたら、なんとなく恐い。しかもそんなに身長がデカい癖に、均等の取れた体は、色気がなんだか溢れているような気がする。

「高階修一。今年で23になりました」
たかしな しゅういち

「…人事部から異動になった生川です。よろしくお願いします」
ペコリと頭を下げるが、隣の男は突っ立ってるだけだ。

バシんと、無駄に広い背中を叩いて頭を下げさせる。「痛い」とか言っていたが聞こえないフリをした。

「よろしくお願いします」

もう一度言つと、あちこちで拍手喝采。多分半分以上は女性であるう。

「生川は、八神の下に付け。高階は樋口の下だ」

「はい」

八神部長は、初老のおじさんで、物凄く優しそうな人だ。やった当たりだ！

対する高階は美人で色気ムンムンのお姉さまの所だ。ああ、セクハラされそうだな。寧ろ、高階が「怪しからんおっぱいだ」とか言いながらあの豊満なおっぱいを揉みくちやにしてそうだ。ああ、なんて卑猥。

とか思った傍から、高階の手が私の腰に回り、撫でまわすところか揉まれた。手の甲を摘まんだ、自己防衛万歳である。

「課長、一つお願いが」

「なんだ？」

課長は優男だ。色素の薄いサラサラの髪に、色素の薄い目。外周りの営業が多いせいか日に焼けた肌。少し垂れ目気味の目はとても優

しそう。

「俺の教育係は彼女がいいです」

「残念だが、君の教育係は樋口だ」

怪しからん教育基、調教しか思い浮かびません。あっはんうつふんしか想像出来なかったのは何も私だけではなかったようだ。

他の若い男性社員は顔を赤らめ、女性はチラチラと私の隣に立つ男を見ていた。

「どうせ怪しからん事をするなら、かの」

「教育イコール怪しからん事じゃないから！」

グリグリと長身の男の足を細く尖がったヒールの踵で踏む。

「いつ……！」

「なんの事だかよくわからないが、君の教育係は樋口と決まってる」

本当になんの事かわかっていない天然課長は、困惑気味であるのに対して、美人なお姉さま部長樋口は、舌なめずりをして、高階を恋の狩人の目をして見ていた。

それを見た高階は咄嗟に私の手を掴んで、課長にアピールする。

「課長、俺は生川さんに一目惚れしたんです！恋のキューピットだと思って協力してください！！」

それを嘘でも本人が居る目の前で言っていわけがない。

「そうか。そうだったのか。そんな事にも気付けなくてすまなかった。樋口には悪いが、高階の教育係は生川にしてみらう。八神には悪いが高階を下に置いてもらう事にする」

多分、課長の頭の中には常時お花畑でモンシロチョウが舞っている。高階のそんな自分の身を守る嘘に騙された課長は、舌打ちをする樋口部長を目に捕らえる事なく、樋口部長の所にあつた、何も置いていない机を八神部長の所に移動していた。意外と力持ちですね。

「生川さん、よろしく願います」

何気なく出された手に手を置こうとしたが、女性社員、特に樋口部長の視線が痛くて手を寸での所で止めたにも関わらず、手を両手で

掴まれて頬擦りされた。背中に大量の冷や汗が流れた。

生川涼音。今年で25歳の彼氏居ない歴イコール年齢な喪女である。

女一人暮らしで休みの時は、髪は一つに括り、ヘアバンドで前髪を上げて、ジャージを着て借りてきたDVDを見ていたら、インターフォンが鳴った。

言わずもなが無視した。またインターフォンが鳴った。しつこいと思って、今度はインターフォンの電源をオフにしたら、今度は玄関の戸をドンドンと激しく叩く音。しょうがないから、ヘアバンドだけ取って玄関に出る。

「はー」

「先輩！！デートしましょう！」

「……………」

何故高階が、私のうちを知っているのだろうか。

ていうか、これは開けるべきなのだろうか。否、開けるべきではない。

「どちら様でしょうか？」

裏声を使ってこれでもかと言うほど高い声で受け答える。

「生川先輩俺とデートしましょう」

「なんで決定事項なのか凄く気になるけどお断りです」

赤の他人だとは思ってすらいないのか、扉越しに居るのが私以外に居ないと決めつけている節があるので速攻裏声はやめた。

「生川せんぱーい！いや、涼音さん！涼音さんここ開けてください！」

ドンドンと扉を叩く高階を無視してDVD観賞に戻ろうとしたまさにその時だった。

「あんらーどうしたのー？」

近所のお節介ババアの声がした。

私が住んでいる部屋はアパートの一階。錆びている階段を登る勇気のなかった私は一階しか住める場所はなかったのだ。

なのでよく近所のお節介ババアが喋らないで欲しい事をべらべらと喋り、ない事ある事噂を立てられこのアパートを後にする者は少なくはない。

「実は」

即座にチェーンを取り去り、鍵を開け、何か言う前に高階をうちに引き込んで鍵を閉めて、チェーンを掛けた。

「どういつつもり？」

「デートしましょう」

「悪いけど、今日はどこかに出掛ける用もなければ家で用事があるから帰って」

「どうせDVDとかでしょう」

わが物顔でうちに上り込む高階は上着を脱いでソファに腰を下ろすとテーブルにあったりリモコンを操作する。

「ちよっ…!？」

「俺これ知ってますよ。昼ドラ並みのドロドロした三角関係の男女の間にまた別の女が出てきてややこしくなる関係の中でヒロインは健気にも相手の事を思って、最後はハッピーエンドっていうゴテゴテの恋愛物映画ですよね」

「……………なんであんた知ってるの」

むしろアンタみたいなのがこれ見てるのが不思議なくらいなだけです。それとも何か実はこういうゴテゴテの恋愛物が好きで、よく見ているとか？

「昔、女と見たんですよ」

「彼女じゃないの？」

「彼女じゃないです。その女は、大学の同じ学部で仲良かったんで一緒によく遊びに行ってたんですよ」

「何人で？」

「二人で」

そりゃデートだよ。

高階はきつと気付かない内にその女とデートして、気付かない内にその気があるような素振りをしたのでろう。

何故か目を瞑っていても想像が出来、その光景がありありと思い浮かべられる。

「へえー」

白い目で高階を見れば、首を傾げて不思議そうな目でこっちを見た。「アンタはどっかに出掛けるんじゃないの？」

「実は、うちに変な女が押し掛けてきたから逃げてきた」

「変な女？」

「ああ……高校の時のクラスメートで、急に会いたくなって、とかなんとか言ってた」

この女タラシはどうやら他にも無意識で女を誘惑しているようだ。きつとが多分では片付けられないくらいに女のトラブルが多発しそうだ。とかこの時の私は軽く考えていた。

願いが叶うなら人事部に居た時の生活が戻ってくる事を祈るばかりだ。

昼時の店はどこも混み合っている。食堂、コンビニ、スーパー。とにかく弁当があるところは混む。そして、それは我が社の食堂も変わらない。なので、私は常時弁当かパンを持参して出勤する。入社当時は酷い目に合ったものだ。四人掛けのテーブルで一人で居れば睨まれ、カウンター席に座れば先輩方にやっかみを受け、もう二度と食堂になんか行くもんかと誓ったあの日。

そんな訳で弁当なわけなのだが、

「先輩、俺にも弁当作ってきてください」

「え…？」

「心底嫌そうな顔しないでください。仮にも恋人でしょう」
お前なんかと付き合った覚えはないし、もし仮にそうでもこういう公の場でそんな事言わないでいただきたい。周りを見る。猛獣という名の女の嫉妬の視線を。痛い程に突き刺さっている。チクチクとか可愛いやつではなく、ザクザクガツガツとかそんな感じの致命傷どころか即死レベルのやつである。

「恋人になつた覚えはないんだけど」

「え…？」

昔のCMでやっていたチワワのデカくてウルウルとした目が脳裏を過つたが、コイツは小型犬ではなく大型犬である。なんだっけアレ。ほら、金持ちの家に一匹は居る感じのするデカワンコ。

あ、ああ、ごーるでんれとればー。よし、思い出した。

「俺達、この間結婚を誓い合った仲じゃないですか」

「そんな記憶もないんだけど。記憶捏造しないでくれない？だいたい、アンタならもつと清纯そうで可愛い感じの女の子捕まえられないでしょ」

「先輩…嫉妬ですか？」

お前の頭の中身は豆腐で出来ているのか？

なんでそうポジティブになれるのか意味わかんないけど、このバカはいつの間にか私の弁当と自分のコンビ二弁当を取り換えて人の弁当を無断で食べていた。

「私の弁当！」

「もう手付けたから俺の！」

どこのガキの言い分だ。と言ってやりたかったが、美味しそうに食べる高階を見て、なんだか許せてきた。しょうがないから、今日はコンビ二弁当にしようとカロリーを見て絶句。

「1000キロカロリー！？やっぱり私の弁当返して！」

んな高カロリーの物食べたら確実に太るじゃないか。最近お腹周りが気になりだしてるというのに、この男は鬼か。

「先輩はもうちょっと太ったっていいですよ。痩せすぎの人ってあんまり好きじゃないから俺」

「高階の意見なんか聞いてないんだけど」

周りを見る。高階のそんな軽々しい発言で、いつもは食べ過ぎないように気を付けている女性陣がお菓子に手を伸ばしてるじゃないか。こんな所でも天然女タラシを發揮せんでもいいのに。

「聞いてくださいよ。最近俺の家の周りウロウロしている女いっぱい居るんで帰るの恐いんですよね」

「なんだか、高階のその話ストーリーカーに付け回されてる女っぽいんだけど」

「それですね。今日は先輩のどこにお世話になろうと思ってとりあえず自分の数日分の着替え先輩の住所に送つとききました」

「返送させていただきます」

結局、数日間家に住まわせる事になったのだが、ここで色々と問題があった。

うちの会社は社内恋愛を禁止にしていなが、高階はモテ男である為女からの誘いが半端なくあった。「高階君うちにおいでよ」「いやいや私のうちに」「なんで生川さんばかりズルいですー」「生川先輩自重してください」「生川死ね」とか、後半部分は射殺さんばかりの殺気が籠っていた。

いやいや、私よりも美女を選ぶべきと主張すれば、高階は斜め47度の角度から「先輩のおっぱいを思う存分揉みたい」と普通の人ならドン引き間違いなしのセリフにも女達は食らいつき「私のおっぱいの方が大きいわよ」「触り心地なら私が！」「形なら誰にも負けないわ」とか負けじと言い募る。

そこで私も頑張った。「私色気ないし」干し物女である私がここのまですりやめてもらいたいと思っていれば、高階の手が私の太ももを触る。

「先輩って、なんか構い倒したくなるんですね」

そこからは放送禁止用語が羅列し、結局昼休みが終わるまで延々と耳元で聞かされていた。

逃げたい。

てな事があり、我が家に到着するなり早速美味しくいただけられた私
だった。骨の髄まで貪られた気分である。
結局週末の休みは高階に抱かれ潰された。
これだから絶倫男は嫌いなのである。

階段を下つていたら、背中を押された。咄嗟に見上げた先に居たのは樋口部長。

「調子こいてんじゃないわよ」

そう、言われた気がして次に聞こえた声は「涼音!!」という男の必死な声だった。

目覚めた先は、仮眠室で私の手を握って、私の顔を眺めているのは高階だった。

「涼音…」

「おいこら疫病神」

心配そうな声に、なぜかこれ以上ないほどに苛つときて、目が覚めて早々に罵声が口から出た。あれは間違いなく樋口部長だった。つて事は、私に纏わりつく高階を、私が唆したとも思つての攻撃なのだろうか、あれは。何にせよ高階が疫病神なのには変わりはない。

「昔を思い出すな」

仮眠室には課長までいた。

「俺も昔、妻に同じ事を言われた」

「そうなんですか？」

「ああ。彼女の後ろを付いて回っていただけなんだが、そのせいで

男に振られたと言っていた。俺には、今でもなんの事かさっぱりわからないんだが」

課長、それは誰でも迷惑だと思います。

そして、課長のそれは、鈍感なだけなのか、それとも鈍感なだけなのか判断しにくい。だとしても、課長と高階のそれは害以外の何物でもない事が判明した。

課長の奥さんは大層苦労したに違いない。

「それが、いつの日か彼女に付きまといっている事が迷惑なんじゃないかと思つて、」

そうだよ。迷惑だったんだよ。でも、これ少女マンガなら間違いない、切な系に突入してすぐに甘い系のラブストーリーになる。「何よいきなり私を避けて。そんな事されても嬉しくないわ。そのせいでアンタの事好きってわかつちゃったじゃない」「……好き？俺の事が？」「…そうよ」「は、はは…ヤバい、俺……今、嬉しすぎて泣きそう…」とかつていう展開になるのが手に取るようにわかるが、そこは「疫病神」と課長を罵った奥さん。絶対そんな展開ではない事ぐらいわかっている。

「とりあえず、彼女の実家に単身乗り込んで、両親と仲良くなつてから彼女が独り暮らししていた家の住所に婚姻届を送ってみた」

「………課長、それはストーカーよりも性質が悪いです……」

いつきに課長が怖くなった。

「そうか？彼女は、その後退職願を出してきたから、俺は彼女と結婚したのだが」

「………課長、それは多分、課長が怖くて逃げる為に退職願を出したんだと思います」

「流石課長！それいいですね。俺も実践してみます！」

「しなくていいから！しなくていいから！！！」

そんな恐ろしい事を実践しようとするな。

課長は気付かないのだろうか。その行為は、少し、いやかなり自分に自信がないとできないという事を。むしろ、奥さんが誰を好きだ

ろうと関係ない。自分の妻にしちゃえば、自分に惚れさせる時間が沢山出来るから気持ちは二の次。そんな感じなのだろうか。だとしたら、課長の性格はかなり歪んでいるという事になるのだが、本人全くの無自覚。それがまた恐怖心を増す。

「高階。それは元から俺と彼女が愛し合っていたから出来た事で、高階は見る限り片思いだろ？ 少しずつ距離を詰めてからにしないさい」愛し合っている前提だったの？

課長、どれだけ自分に自信あったんですか。それじゃ、奥さんが報われません。勘違いも甚だしいです。きっと多分奥さんは、離婚届を出すタイミングを今か今かと伺っていると思います。

「ところで、生川。なんで階段なんかで転んだんだ。悪阻か？」

ようやくと本題、しかもシリアスな言い出しにちよつと安心した自分がバカみたいだ。いや、バカだバカ。

「本当か、涼音！ 女の子かな、男の子かな。俺は女の子がいい」

「女の子はいいぞ。可愛くてなあ。『パパのお嫁さんになる』なんて言われた日には、契約一日で五つ取れた」

そつえば、絶対調だった日があったそうですね。人事部でも大騒ぎになってました。

「いいですねー、女の子。でも男の子も捨てがたい」

「男の子は、将来好きな野球とサッカーの試合を観戦しながらビールを飲むのが夢だな」

「いえ、あの、悪阻でもなんでもないですから。勝手に話を盛り上げないでください。ていうか、なんでそんなに乗り気なんですか。なんで私が妊娠した事前提で話を進めるんですか。いい加減本題に入りましょうね」

無理矢理本題に入らせ、「実は」と繋げる。課長の奥さんは間違いなく課長の天然で苦労している。会った事もないのに、奥さんの健康が心配だ。

「突き落とされたんです」

「…突き落とされた？」

「座位か！！？誰だ、俺の涼音を犯した奴は！！！」
なんでそうなる。

この二人はシリアスな話に持っていく事がいやなのだろうか。なん
でそこまでボケ倒すのか意味がわからない。課長の奥さんはいつか
胃に穴が空くと予想。

「警察沙汰じゃないか。一体誰がそんな事を」

「……………」

言いにくいけど、ここはちゃんとと言わないとダメだ。本人の為にも
ならない。そういうのはちゃんと反省して人生歩んでいかないと金
目当ての二トなダメ男に捕まるって、人事に居た時の仲の良い同
僚が言っていた。

「あ」

「今なら強姦罪で訴える事がで」

「あの、樋口部長に階段の上から突き落とされました」

課長の言葉を遮って、事実を口に出す。

もう嫌だ。この二人の相手ちょー疲れる。高階だけでも疲れるのに、
課長と一緒にダブルパンチ。奥さんはなんでこの人と結婚し…そう
いえば無理矢理でしたね。

「樋口部長が？」

「そっか…。きっと、樋口部長より涼音の方が仕事出来るから気に
食わなくてドン、ですかね。課長」

「そうだな。人事部なんてどの部署と比べても多忙だからな。仕事
が早くて当たり前なんだが…」

「そういうこっちゃないでしょう。樋口部長は明らかに高階を狙っ
ていましたので、高階が付き纏っている私が気に入らないんですよ」
決して仕事の事だけで、女はそんな攻撃的にならない。女が攻撃的
になるのは少なくとも、男が関わっている時だけだ。それが、単純
に性格が合わないからとかだけだ。

「…っ！！？」

「なんで二人揃ってそんな反応するんですか。見ればわかるじゃな

いですか。高階なんか顔だけやったらめったらいいし、仕事も出来るし未婚なんて女の目から見れば優良株なんですよ」

「…それは、気付かなかったな…」

「俺、涼音しか目に入らなかったから、一瞬樋口部長って誰とか思ってたぐらいなのに…」

鈍感も度を越えれば迷惑でしかない。

「樋口の処分は考えておく。生川、体だけは大事にするんだぞ」

「課長…」

課長は、それから携帯に電話が入ると「得意先からの電話が来たらしい」と言っただけで仮眠室を出て行った。

「涼音、結婚しようか」

「お断りします」

課長、貴方に「体だけは大事にしろ」と言われても説得力がありません。それと課長の奥さんが不憫でなりませんので、離婚届を出された潔くサインしてあげてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1846t/>

天然恋物語

2011年7月12日20時58分発行